

# 本州北端の玦状耳飾り

福田友之

## I. はじめに

縄文時代の装身具のひとつに「玦状耳飾り」がある。環状形の一カ所に切り目の入った耳飾りである。東日本では縄文時代早期末葉から中期にかけて用いられた。大半は石製品である。本州北端に位置する青森県域では、ほとんどすべてが縄文前期・中期の円筒土器文化の遺跡から出土している。

東日本の縄文時代には、地域・時期によって多種多様な装身具が用いられており、本県域も同様である。近年、これらの装身具について少しづつ研究成果が発表され、津軽海峡に面した本県域のもつ地域的特性が次第に明らかにされつつある。津軽海峡は縄文時代以降、本州と北海道を結ぶほかに日本海と太平洋を結ぶ海の交通路として各時代それぞれの文化の展開に大きな役割を果たしてきており、とくに広域分布をひとつの特色とする玦状耳飾りについても、本県域の状況が注目されるところである。しかしながら、この地域の状況については、平成元年(1989)に福地村館野遺跡の出土例に関する<sup>(注1)</sup>白鳥文雄氏によって触れられたのみである。その際に扱った資料は8遺跡・12点(出土地不明分を含めると17点)である。しかし、本県域では、その後新資料が多数出土している状況がある。そこで本稿では、本県域出土の玦状耳飾りを集成し、その時期や意義等について若干述べてみたい。

## II. 青森県域出土の玦状耳飾りとその出土状況

本県域では現在18カ所の遺跡から、35点(出土地不明分も含めると41点)の玦状耳飾りが出土している。出土状況には、遺構から出土したものと遺構外の包含層から出土したものがある。遺構別では竪穴住居跡・土坑・盛り土がある。

### (1) 遺構からの出土例(図2~4、表1、写真1)

#### A. 竪穴住居跡からの出土例

現在、5遺跡から6点出土している。

##### ①八戸市西長根遺跡(27。中期中葉・大木8b式期)<sup>(注23)</sup>

第10号住居跡(長径8.6m以上、短径7.2mの楕円形プラン)の覆土4層から多数の深鉢形土器のほか、石鎌・尖頭器・石匙・石錐・スクリイバー・磨製石斧・敲き石・すり石・砥石・軽石製品等の各種石器、環状土製品・硬玉製の大珠とともにヒスイ製の玦状耳飾り片(重さ4.3g)が1点出土した。

##### ②深浦町津山遺跡(1。中期初頭・円筒上層a式期)<sup>(注2)</sup>

第9号住居跡(長径7.94m、短径6.08mの楕円形プラン。円筒下層d式期)の覆土から多数の円筒上層a式土器片のほか、石鎌・石匙・両面加工石器・不定形石器・異形石器・石錐・すり石・半円状偏平打製石器・剝片・チップ類多数とともに軟玉製の玦状耳飾り片(重さ9.0g)が1点出土した。

##### ③脇野沢村瀬野遺跡(19・20。前期末葉・円筒下層d式期~中期初頭・円筒上層a式期か)<sup>(注16)</sup>

第2号住居跡と第5号住居跡から計2点出土している。第2号住居跡(長さ5.70m、幅4.75mの隅丸長方形プラン)覆土から円筒下層d式を主体(円筒上層a式も少しある)とする多数の土器片のほか、石鎌・石槍・石錐・石匙・剝片・磨製石斧・石錐・すり石・礫器・石皿・軽石製品とともに

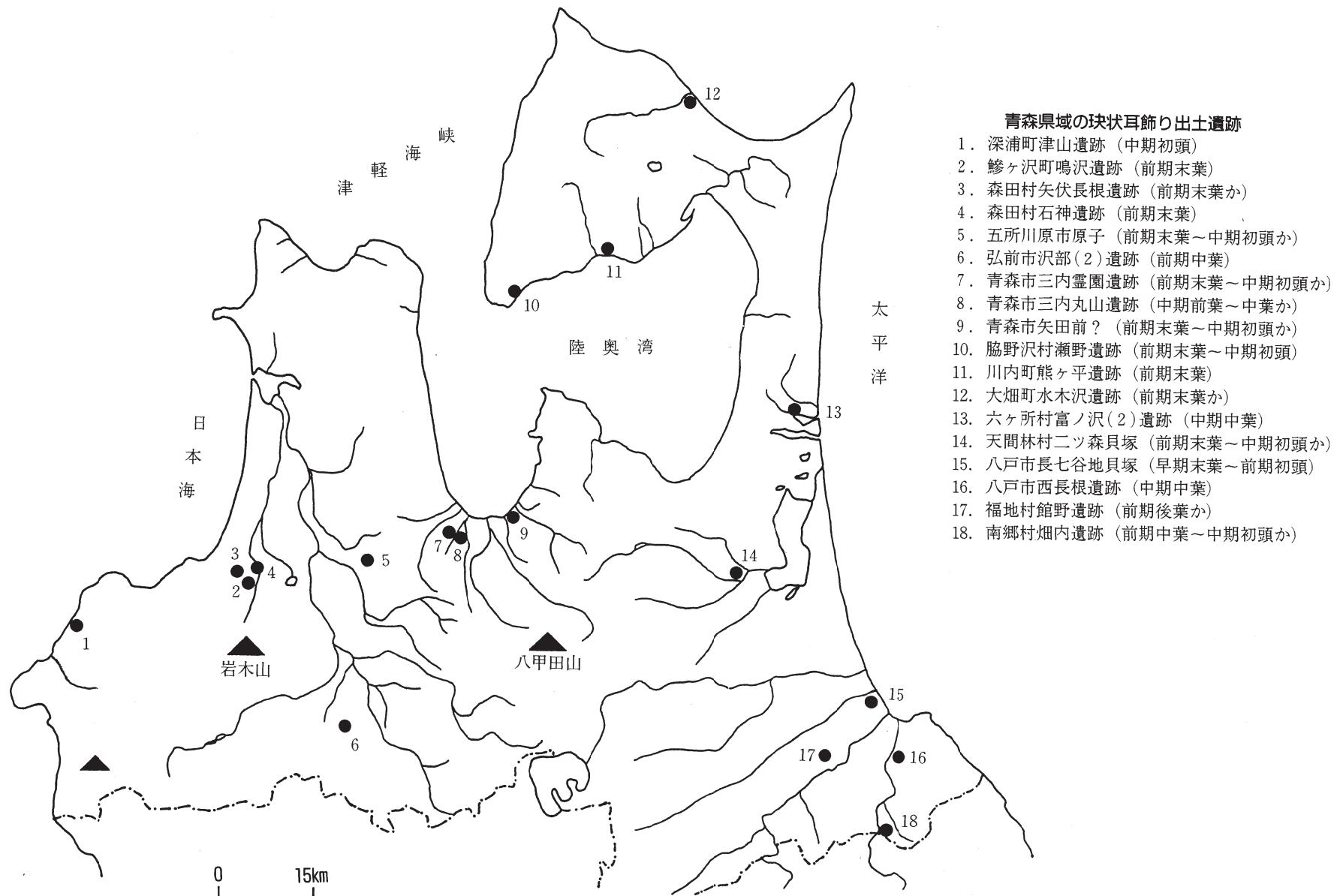


図1 青森県域の玦状耳飾り出土遺跡

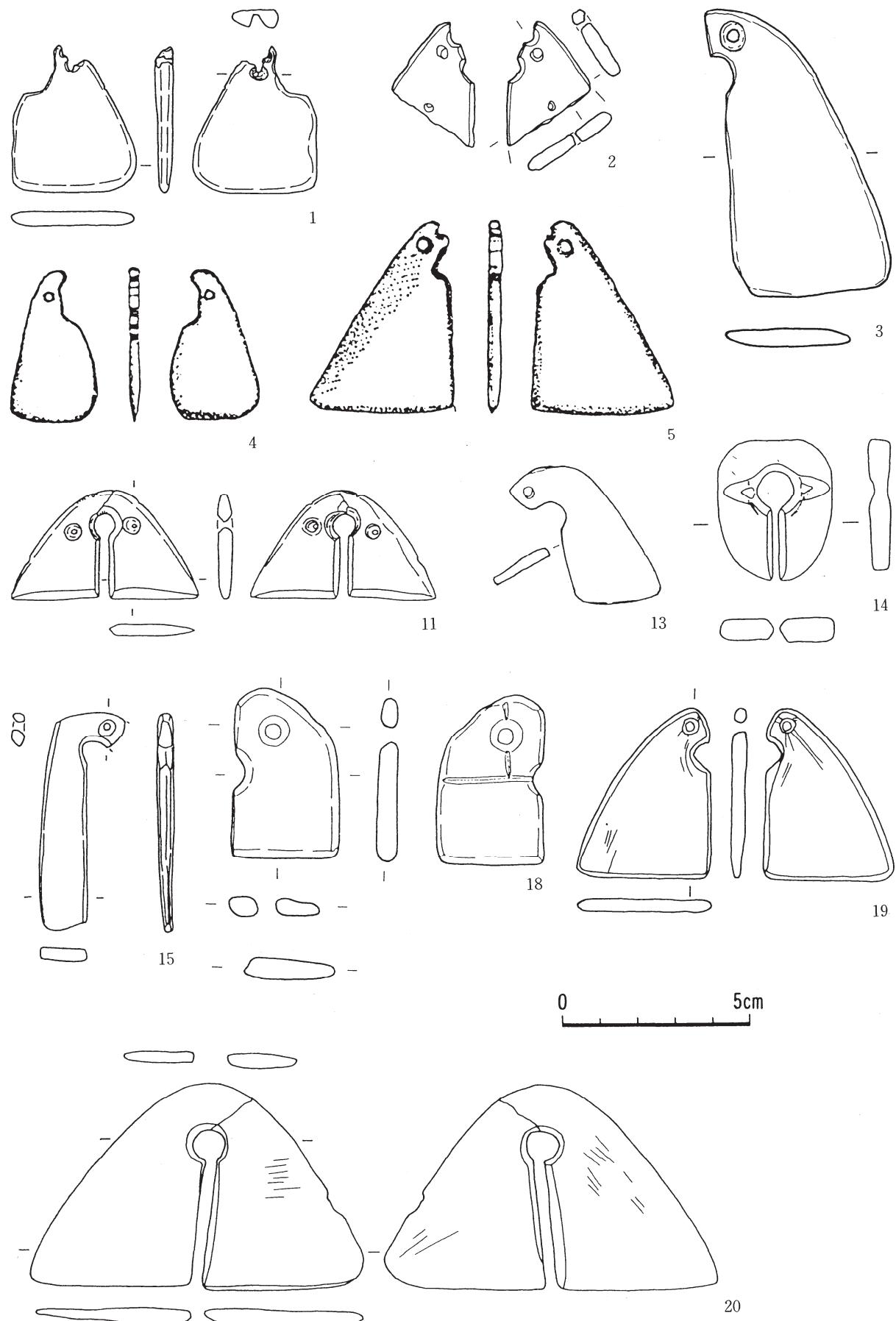


図2 青森県域出土の块状耳飾り(1)

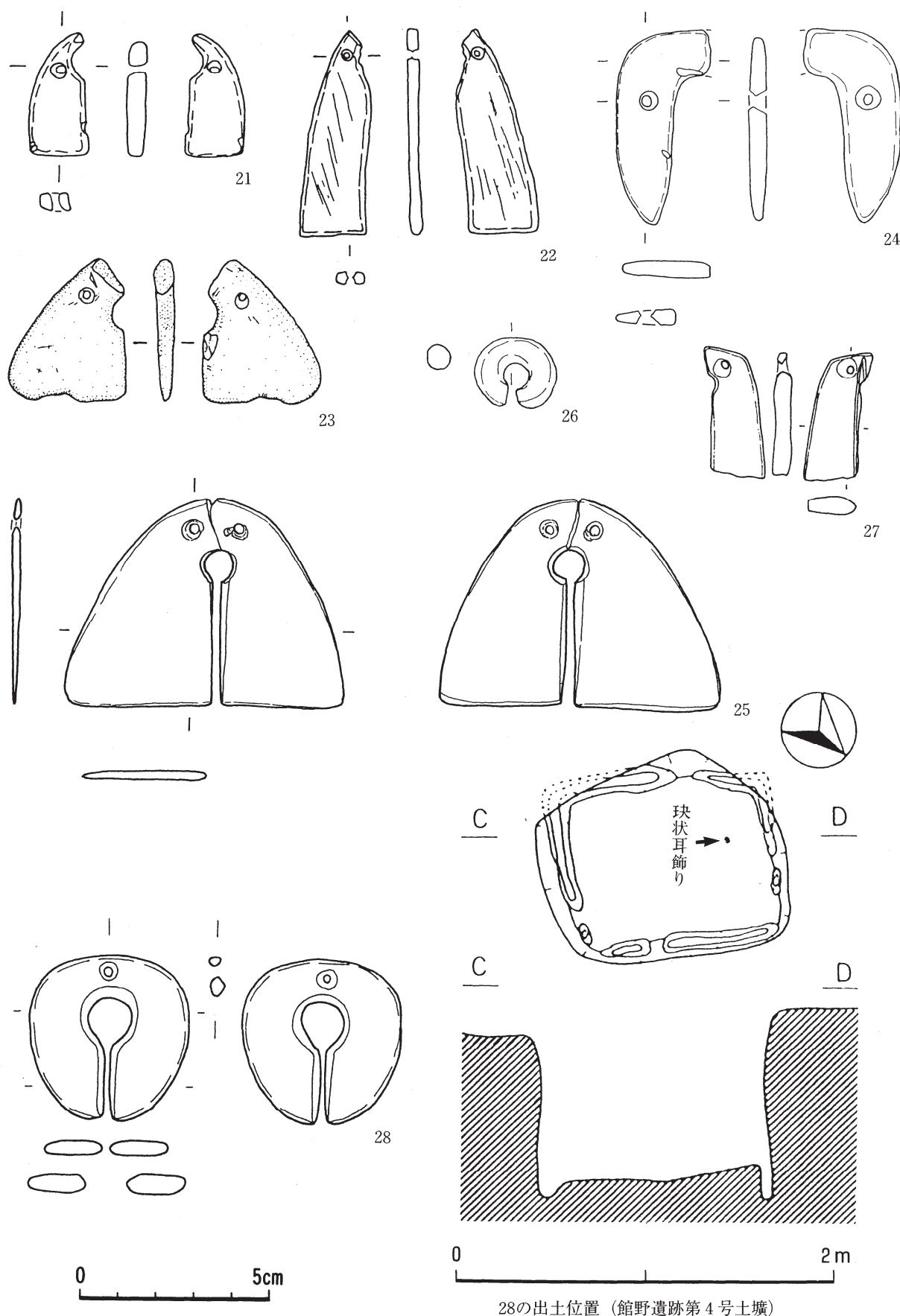


図3 青森県域出土の块状耳飾り(2)

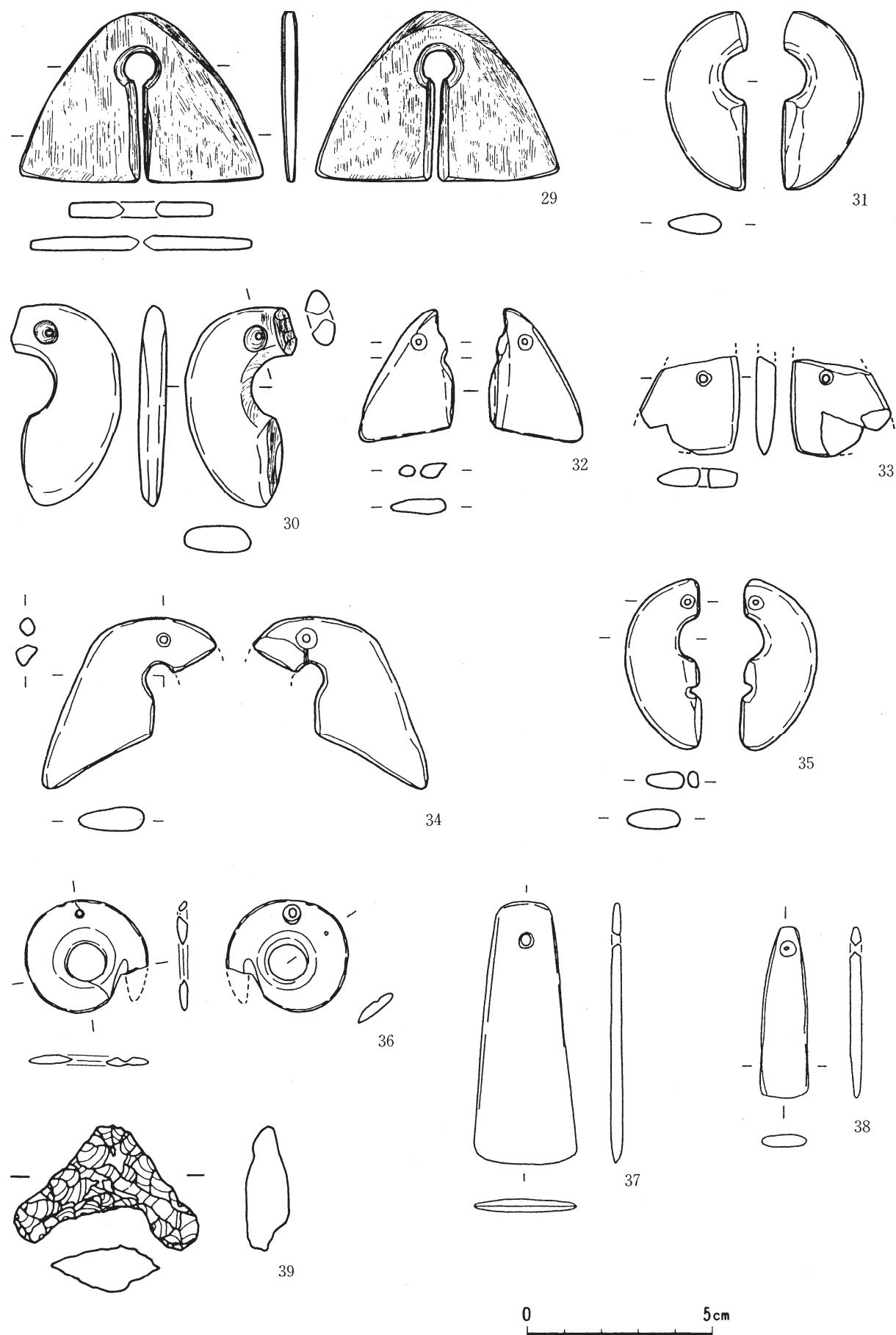


図4 青森県域出土の玦状耳飾り(3)と関連資料

表1 青森県域出土の块状耳飾り一覧

番号	遺跡名	点数	出土状況	時期(土器型式)	石材	注	備考(形態など)
図2-1	深浦町津山	1	第9号住居跡覆土	中期初頭(円筒上層a式)	軟玉	2	三角形,半欠,1孔,9.0g,住居跡は円筒下層d式期
2-2	鰐ヶ沢町鳴沢	1	包含層	前期末葉(円筒下層d2式)	粘板岩	3	三角形,半欠,2孔
2-3	森田村矢伏長根	1	表面採集	前期末葉か	滑石	4	三角形,半欠,1孔,旧勝山ヤブシ長根配石遺跡
2-4	森田村石神	1	1区包含層	前期末葉(円筒下層d1式)	滑石	5	三角形,半欠,1孔
2-5	森田村石神	1	4区包含層	前期末葉(円筒下層d1式)	凝灰質硬砂岩	5	三角形,半欠,1孔
写1-6	森田村石神	1	採集	前期末葉か	蛇紋岩?	6	三角形,半欠,1孔,PL.38-8
1-7	森田村石神	1	採集	前期末葉か	蛇紋岩?	6	三角形,半欠,孔不明,PL.38-9
1-8	森田村石神	1	採集	前期末葉か	蛇紋岩?	6	三角形,半欠,1孔,PL.38-10
1-9	森田村石神	1	採集	前期末葉か	蛇紋岩?	6	三角形,半欠,1孔,PL.38-11
1-10	森田村石神	1	採集	前期末葉か	緑色碧玉?	6	長方形,完形,上部1孔,擦切線,PL.38-12,未製品か
図2-11	五所川原市原子	1	採集	前期末葉～中期初頭か	蛇紋岩	7	三角形,破片2点(各1孔,色違い)接合
写1-12	弘前市沢部(2)	1	包含層	前期中葉(円筒下層a式)	滑石	8	方形未製品,中央窪み,図版第5図-4,旧沢部II号遺跡
図2-13	青森市三内霊園	1	包含層	前期末葉～中期初頭か	不明	9	三角形,半欠,1孔
2-14	青森市三内丸山	1	以下,盛り土主体	中期前葉か	—	10	円形(隅丸方形状),完形
2-15	青森市三内丸山	1		中期中葉か	—	10	長方形(縦長),半欠,1孔
写1-16	青森市三内丸山	1		中期前葉	—	11	長円形,完形,P-102右上
写1-17	青森市三内丸山	1		中期前葉か	蛇紋岩?	11	三角形,半欠,1孔,P-102左下
—	青森市三内丸山	1		中期前葉か	—	11	三角形,半欠,1孔,P-102右下
—	青森市三内丸山	2		中期前葉か	蛇紋岩等?	12	三角形,半欠,各1孔,P-53上中,下左
—	青森市三内丸山	1		中期中葉か	—	13	長方形,半欠,1孔,P-30中
図2-18	青森市矢田前?	1	採集	前期末葉～中期初頭か	不明	14・15	将棋形,半欠,1孔,再加工,市内矢田か?
2-19	脇野沢村瀬野	1	第2号住居跡覆土	前期末葉(円筒下層d式)	蛇紋岩	16	三角形,半欠,1孔,9.7g
2-20	脇野沢村瀬野	1	第5号住居跡覆土	前期末葉～中期初頭(円筒d～円上a)	翡翠	16	三角形,破片2点(孔なし)接合,30.7g,住居跡は円筒下層b式期
—	脇野沢村瀬野	1	表面採集	前期～中期	不明	17	三角形,半欠,藤沼邦彦氏が1969年5月に表面採集
図3-21	川内町熊ヶ平	1	捨て場A(包含層)	前期末葉(円筒下層d1式主体)	玉髓	18	三角形,半欠,1孔
3-22	川内町熊ヶ平	1	捨て場A(包含層)	前期末葉(円筒下層d1式主体)	珪質頁岩	18	三角形(縦長),半欠,1孔
3-23	大畠町木木沢	1	包含層	前期末葉か	滑石	19	三角形,半欠,1孔,8.0g
3-24	六ヶ所村富ノ沢(2)	1	第9号住居跡床面	中期中葉(楕林式かそれ以前)	緑色ホルンフェルス	20	長方形,半欠,1孔,7.7g
3-25	天間林村二ツ森	1	表面採集	前期末葉～中期初頭か	緑色細粒凝灰岩	21	三角形,破片2点(各1孔)接合,19.5g
3-26	八戸市長七谷地	1	包含層	早期末葉～前期初頭	滑石	22	円形(環状),完形
3-27	八戸市西長根	1	第10号住居跡覆土	中期中葉(大木8b式)	翡翠	23	将棋形(縦長),半欠,1孔,4.3g
3-28	福地村館野	1	第4号土壤底面	前期後葉か	緑色ホルンフェルス	15	円形,完形,上部に1孔,16.0g,II区,県立郷土館展示
図4-29	南郷村畠内	1	包含層	前期末葉～中期初頭か	緑色凝灰岩	24	三角形,完形,17.7g
4-30	南郷村畠内	1	第40号住居跡	前期中葉～末葉か	蛇紋岩	24	円形,破片,16.4g,再加工
4-31	青森市内	1	採集	前期後葉か	滑石か	1	円形,破片,孔なし,県立郷土館蔵
4-32	青森市内	1	採集	前期末葉～中期初頭か	滑石か	1	三角形,破片,1孔,県立郷土館蔵
4-33	五所川原市内	1	採集	前期末葉～中期初頭か	滑石	26	三角形,破片,1孔
4-34	深浦町内	1	採集	前期末葉～中期初頭か	滑石か	1	三角形,破片,1孔,県立郷土館蔵
4-35	不 明	1	採集	前期後葉か	滑石	1・25	円形,破片,上部に1孔,県立郷土館蔵
—	不 明	1	採集	前期～中期	不明	27	破片,個人蔵,佐井村内出土か

※なお、三内丸山遺跡からは以上の他にも块状耳飾りが出土しており、計10点以上になるとみられる。また、村越潔氏は青森市新城岡町遺跡、木造町田小屋野貝塚出土の块状耳飾りが県立郷土館に収蔵されている旨記載されている（注8、28）が、この表にあるものと同一のものかどうかを含めて不明である。また、石材の記述については、統一がとれていないものがあるがあえて引用文献どおりにした。

に蛇紋岩製の块状耳飾り片(重さ9.7g)が1点出土した。また、第5号住居跡(径約5.60mの円形プラン。円筒下層b式期)覆土から円筒下層b式・d1式土器片、円筒上層a・b式土器片のほか、石槍・剣片・磨製石斧とともに翡翠製の块状耳飾り片が2点(接合した。重さ30.7g)出土した。

④六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡<sup>(注20)</sup>(24。中期中葉・榎林式期かそれ以前)

第9号住居跡(長さ4.9m、幅約3.5mの隅丸長方形プラン)床面から不定形石器とともに緑色ホルンフェルス製の块状耳飾り片(重さ7.7g)が1点出土した。ただし、土器は出土していない。

⑤南郷村畠内遺跡<sup>(注21)</sup>(30。前期中葉～末葉か)

第40号住居跡(長さ5.1mの不整形プラン。後期前半期)覆土から前期中葉・末葉、後期前半の土器片や石範とともに蛇紋岩製の块状耳飾り片(重さ16.4g)が1点出土した。

### B. 土坑からの出土例

現在、1遺跡から1点出土している。

①福地村館野遺跡<sup>(注22)</sup>(28。前期後葉か)

II区第4号土壙(長さ1.30m、幅1.10mの不整長方形プラン。深さ0.90m。時期不明)の北西側の底面直上から緑色ホルンフェルス製の块状耳飾りの完形品(重さ16.0g)が1点出土したが、ほかの遺物はまったく出土していない。また、内部から人骨や赤色顔料は検出されていないが、プラン等から土壙墓とみられる。

### C. 盛り土からの出土例

現在、1遺跡から出土している。

①青森市三内丸山遺跡<sup>(注10～13)</sup>(14～17。中期前葉～中葉か)

盛り土遺構から完形品が2点・破片が6点出土している。従来であれば、遺構以外の包含層の出土品として扱われてきたものであろう。なお、この遺跡からはこれらのほかにも块状耳飾りが出土しているが、整理途中のため、正確な出土点数や出土状況・共伴した土器等は不明である。

### (2) 遺構外からの出土例(図2～4、表1、写真1)

①包含層からの出土例

現在、8遺跡から12点出土している。

早期末葉～前期初頭とされる八戸市長七谷地貝塚例<sup>(注23)</sup>(26)、前期中葉の弘前市沢部(2)遺跡例<sup>(注8)</sup>(12)、前期末葉とされる鰯ヶ沢町鳴沢(2)<sup>(注3)</sup>、森田村石神(4・5)<sup>(注5)</sup>、川内町熊ヶ平(21・22)<sup>(注18)</sup>、大畠町水木沢(23)<sup>(注19)</sup>の各例があり、ほかに前期末葉～中期初頭とみられる青森市三内靈園(13)<sup>(注9)</sup>、天間林村二ツ森貝塚(25)<sup>(注20)</sup>、南郷村畠内(29)<sup>(注21)</sup>例等がある。

②採集例

出土状況がまったく不明な採集品が13点(3・11・18・6～10・31～35)あるが、そのなかには五所川原市原子(11)<sup>(注7)</sup>発見の完形(復元)品がある。また、石神(10)には、块状耳飾りの製作工程途中の未製品とみられるもので、両面の孔の上下に縦の擦切り痕を残したものもある。

## III. 青森県域の块状耳飾りの様相

つぎに、本県域出土の块状耳飾りの形態分類を行い、それぞれの時期について述べるが、本来の形狀が想定されうるものに限定する。

### (1) 塗装耳飾りの形態分類(図2～4、写真1)

本県域出土の块状耳飾りは大きくつぎの5タイプに分類される。

Aタイプ・・・円形(環状)で丸い断面をもつ。長七谷地貝塚から滑石製品(26)が出土している。

Bタイプ・・・円形(環状)で断面は扁平。切り目は縦の長さの1/2程度のもので、滑石製品とみられる青森市内例等(31・35)がある。

Cタイプ・・・円形(やや角張る)で断面はやや扁平。切り目は縦の長さの1/2程度のもので、滑石・蛇紋岩製品がある。沢部(2)例(12)は未製品、三内丸山(14・16)・館野(28)例は完形品で、館野例上部には1カ所貫通孔がある。また、畠内例(30)は欠損品であるが、破損面を磨って再利用したものである。

Dタイプ・・・長方形で断面は扁平。長い切り目をもつ。富ノ沢(2)例(24)は緑色ホルンフェルス製、三内丸山例(15)は長方形で縦長のものである。

Eタイプ・・・三角形で断面は扁平。頂部は弧状で、両端は丸みを持つものが大半を占める。大半が縦の長さの1/2以上の長い切り目を持つ。蛇紋岩・緑色凝灰岩製品等がある。本県域の块状耳飾りには、このタイプのものがもっとも多くあるが、さらにつぎのように細分される。

(a)横長のもの・・・津山(1)、石神(4~9)、原子(11)、三内靈園(13)、三内丸山(17)、瀬野2例(19・20)、水木沢(23)、ニッ森(25)、畠内(29)、青森市例(32)があるが、水木沢例のように切り目が短いものもある。

(b)ほぼ正三角形のもの・・・矢伏長根(3)、熊ヶ平例(21)がある。

(c)縦長のもの・・・熊ヶ平例(22)がある。

(d)将棋形を呈するもの・・・上部が将棋の駒のように角張ったもので西長根例(27)がある。

Fタイプ・・・A~Eタイプ以外のものをここに分類したが、将棋形の矢田前?例(18)、下部が斜辺状を呈する深浦町例(34)がある。矢田前?例はE(d)タイプ、深浦町例はE(a)タイプに入れるべきかも知れないが、ともに再加工品とみられ、もともとの形態が不明なものである。

## (2) 块状耳飾り各タイプの時期

つぎに、各タイプの所属時期について述べるが、共伴した土器がわかるものから述べる。まず、本稿でAタイプとした長七谷地例は、伴出した土器が縄文早期末葉から前期初頭のものであることから、この時期のものと考えられる。また、Cタイプとした沢部(2)例は前期中葉の円筒下層a式土器、畠内例は前期中葉~末葉の土器に共伴していることから、それぞれの土器の時期のものと考えられる。また、Dタイプとした富ノ沢(2)例は、竪穴住居跡内における土器との共伴関係から中期中葉のもの、また、E(a)タイプとしたものは、竪穴住居跡の内外で円筒下層d式~円筒上層a式土器に共伴する場合が多いことから、前期末葉か中期初頭と考えられる。また、E(b)タイプとしたものは熊ヶ平例によって前期末葉(円筒下層d式)と考えられ、E(c)タイプとしたものも同時期であろう。また、E(d)タイプとしたものは、西長根例が中期中葉の大木8b式土器に共伴していることから、この時期と考えられる。また、Fタイプとしたものは、再加工の前の形態が三角形であったとみられることから、前期末葉か中期初頭と考えておきたい。

なお、以上のはかに共伴した土器が不明であり、本県域の資料によるだけでは時期決定ができない

ものがあるため、これらについては諸先輩の研究成果や他県の例を参考にして述べる。

わが国出土の玦状耳飾りの型式分類は、樋口清之氏(A～F分類)をもってはじめとするが、その後新たな分類と年代比定が藤田富士夫、西口陽一(①～⑪区分)、堀江武史(A～E分類)氏等によって行われている。また、近隣の北海道の玦状耳飾りについては、三浦正人氏がまとめたものがある。

これらによれば、本稿のAタイプは、樋口氏のC類、西口氏の①に相当し、時期は藤田氏の富山県編年によれば前期初頭、西口氏も前期初頭としていることから、長七谷地例を早期末葉の土器もあることによって早期末葉と即断することはできない。早期末葉～前期初頭の時期と幅広く考えておくべきであろう。また、Bタイプは、本県では土器との共伴例がないが、秋田県協和町上ノ山II遺跡例(大木4・5式期主体)に類例があり、前期後葉と考えられる。樋口氏のC類、西口氏の③に相当し、西口氏も前期後半と推定している。また、Cタイプとした館野例は土壙墓内から出土した本県域唯一の例で、伴出土器はないが、上ノ山II例に類例があることから、同様に前期後葉と考えられる。樋口氏のB類、西口氏の④か⑤に相当するが、西口氏も⑤を前期後葉と推定している。また、E(a)～(c)タイプは、近隣では北海道函館市サイベ沢遺跡で円筒下層d1式に伴って出土し、同余市町フゴッペ貝塚のFH-20住居跡では前期末葉～中期初頭の土器に伴って出土している。<sup>(注36)</sup>このうちE(a)タイプは西口氏の⑨、E(b)タイプは樋口氏のE類、西口氏の⑥、E(c)タイプは西口氏の⑧に相当するが、西口氏もE(a)～(c)タイプを前期末葉～中期初頭と推定している。

なお、三内丸山例は、中期とされる盛り土遺構から出土したものが大半である。中期がまちがいなものとすれば、形態的にみて、Cタイプの(14)・(16)は前期の形態に近い点から、中期前葉あたり、また、Dタイプとした方形(樋口氏のA類、西口氏の⑦に相当)で、とくに縦長の三内丸山例(15)は、<sup>(注37)</sup>岩手県北上市権山遺跡第II区例(中期中葉・大木8a式期)に長方形状の類例があることから、中期中葉あたりであろうか。ただし、三内丸山例については玦状耳飾りの全容がまだ発表されていないため、結論は差し控えておきたい。報告書の早期刊行が期待される。

### (3) 现状耳飾りの製作と用途

石神・沢部(2)の両遺跡から玦状耳飾り未製品とみられるものが各1点出土している。これから両遺跡を、ただちに玉作り(攻玉)遺跡とすることは、未製品等が少ないためできないが、津軽でも前期中葉～前期末葉の頃には、玦状耳飾りが作られていたことは間違いない。ただし、それが当地から他地域へ供給を目的としたものであったとは考えられず、もっぱら自家用目的であったとみられる。

また、玦状耳飾りの用途に関しては、前に述べたように、土壙墓内で人骨とともに出土した例は本県域では皆無であり、唯一土壙墓から出土した館野の場合は1点のみの出土であった。このことから前期後葉頃の本州北端地域では、玦状耳飾りの片耳装着が行われていたことが想定される。また、本県域から出土した玦状耳飾りの破損品は、大半が上部に1カ所穿孔されたものである。これらは、矢田前？・畠内例等の破損面に整形痕が認められることから、最終的に垂飾品(ペンダント)として再利用されたものが大半であったと考えられる。

### (4) 现状耳飾りと同時期の装身具(図5)

伊豆の八丈島(東京都八丈町)にある倉輪遺跡(前期末葉～中期初頭)から、本県域に多いE(a)タイプの玦状耳飾りが1点(40)出土している。ここからは「の」字状石製品も1点(41)ともに出土している。ひらがなの「の」の字に似ていることから命名された装身具であり、本県では三戸町泉山遺跡で中期中葉の土器とともに1点(36)出土している。<sup>(注40)</sup>この石製品は、新潟県や北陸地方を主として全

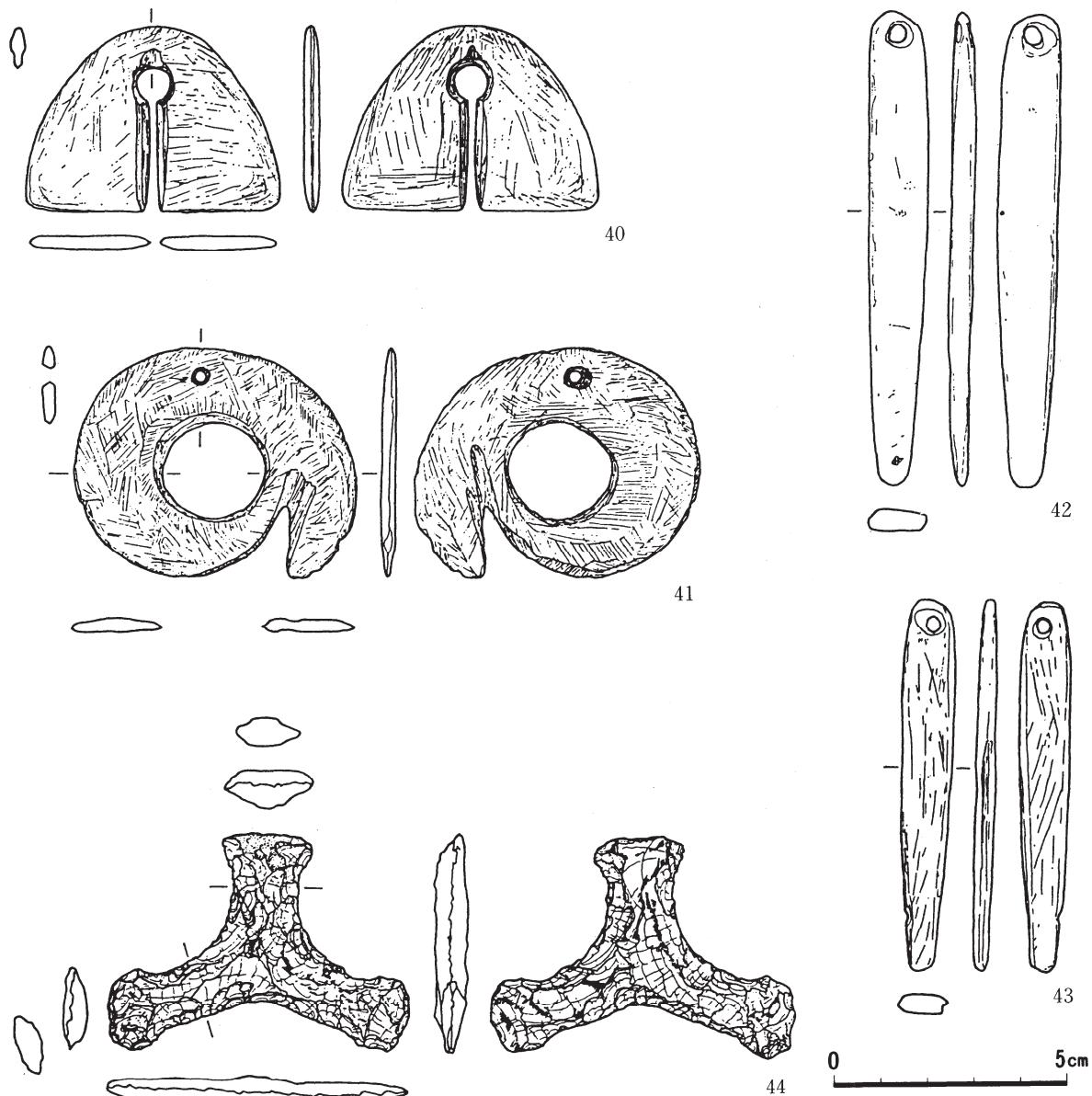


図5 八丈島倉輪遺跡出土の石製装身具

国12遺跡から13点出土しており、主たる時期は前期末葉～中期初頭である。これらのなかで泉山例のみがやや新しいのは伝世されたためとみられるが、これも本来的にはE(a)タイプの玦状耳飾りと同時期に用いられた装身具である。また、倉輪では、玦状耳飾りの破片を再加工した蛇紋岩製のペンダントが1点出土し、<sup>(注39a)</sup>墓壙内では壮年女性の後頭部付近から棒状垂飾が2点(42・43)発見されている。藤田氏は、これを「ヘラ状垂飾」と呼称し、「ヘアピン」に類した髪飾りと考えているが、これと多少形態は異なるものの、短冊状の石製垂飾品が三内丸山からも出土<sup>(注10)</sup>(37・38)している。玦状耳飾りと同様の蛇紋岩製である。時期は不明であるが、玦状耳飾りに並行する時期のものであろう。今ここで、仮りに「短冊形垂飾品」と呼称するが、棒状垂飾とは上部の1孔と細長い点が類似している。しかし、三内丸山2例の両端が幅広で直線的である点が異なっている。したがって、これと倉輪例を直接結びつけることはできないが、三内丸山では、玦状耳飾りと同時期に、場合によってはセットとして「短冊形垂飾品」が垂飾品(ペンダント)として用いられたことも考えられる。倉輪ではさらに、これらの石製品とともに「Y字状石製品」(頁岩製)も1点(44)出土している。これに類似した石器は、本県で

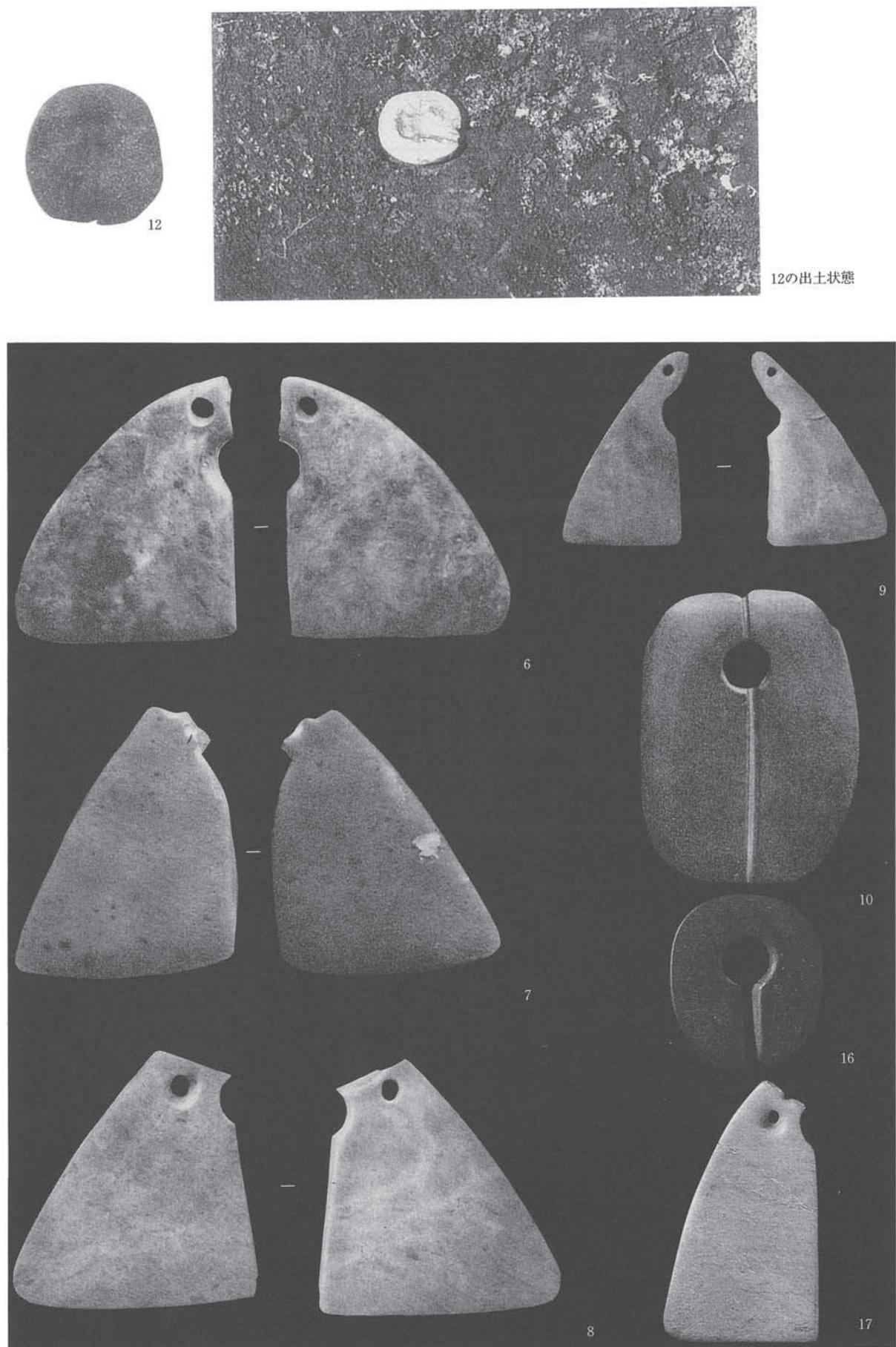


写真1 青森県域出土の玦状耳飾り  
(縮尺は、ほぼ原寸大にあわせてある)

は異形石器として扱われ、泉山例<sup>(注40)</sup>のほかにやや形態が異なるものの熊ヶ平・富ノ沢<sup>(2)</sup><sup>(注18)</sup><sup>(注43)</sup>等のほか東北・北海道各地から出土している。これらの石器は剥片石器のため一般的には何らかの利器と考えられがちであるが、装身具と考えることはできないものであろうか。装身具とすれば、「短冊形垂飾品」と同様に、玦状耳飾りと同時期に、場合によってはセットとして用いられた可能性も考えられるのである。

#### IV. おわりに

以上、青森県域出土の玦状耳飾りを紹介し、型式分類・時期比定等を行った。また、同時期の関連するとみられる装身具についても触れた。これによって、本県域の玦状耳飾りは、縄文早期末葉～前期初頭のものを最古とし、前期中葉・後葉から、中期初頭・中葉へとほぼ時期的につながることが明らかになった。そして、そのなかで前期末葉～中期初頭のE(a)～(c)タイプ(三角形)のものがもっとも多い(全体の過半数を占める)ことも判明した。しかし、共伴した土器が不明であるため、明確な時期比定ができなかったものも多い。また、本県域において玦状耳飾りと同時期の装身具として一般的に知られるものは、中期前葉以降のヒスイ製品であるが、本稿で指摘したそれ以外の石製品は、東北地方では類例がきわめて少ないこともあって、従来ほとんど指摘されなかつたものである。今後、玦状耳飾りを考える際に注意してもよい遺物であろう。

現在、本県域出土の玦状耳飾り総数は41点(18遺跡以上)である。この数は北海道や東北各県とくらべて決して少ないわけではなく、むしろ多いと言うべきであろう。これらの玦状耳飾りは、早期末葉～前期初頭の攻玉遺跡が多数分布する北陸地方(長野県北部を含む)<sup>(注31)</sup>から継続的に大半がもたらされたものとみられる。それは攻玉遺跡の有無・技術・石材の点から推測されることである。玦状耳飾りをめぐる北陸地域と津軽海峡域との長期にわたる交流が想定される。その交流のなかで、本稿でE(a)～(c)タイプとした前期末葉の玦状耳飾りは列島規模で広範囲に分布しており、中期前葉以降にとくに緊密化する「北陸地域(糸魚川)～津軽海峡域間のヒスイをめぐる長距離交流の直前ないしは開始段階」を象徴する装身具と考えられる。玦状耳飾りの研究は、単にその装身具としての意味だけではなく、文化交流史的意味からも重要である。

黒潮洗う絶海の孤島・八丈島倉輪遺跡からは、先に述べたE(a)タイプの玦状耳飾りとともに北陸系土器や糸魚川産ヒスイとみられる玉類も出土している事実は、その意味できわめて象徴的である。

本稿を終えるにあたり、弘前大学人文学部の藤沼邦彦氏、天間林村教育委員会の甲田美喜雄氏、県教育庁文化課三内丸山遺跡対策室の岡田康博・中村美杉両氏、県埋蔵文化財調査センターの木村鐵次郎・白鳥文雄両氏からは種々ご教示をいただいた。また、畠内遺跡出土の資料は当センターの茅野嘉雄氏に実測していただいた。銘記して感謝申しあげる次第である。

#### 『注』

- (1)白鳥文雄 1989 「玦状耳飾りについて」 『館野遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第119集
- (2)青森県埋蔵文化財調査センター 1997 『津山遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第221集
- (3)青森県埋蔵文化財調査センター 1992 『鳴沢遺跡・鶴喰(9)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第142集
- (4)西村正衛・櫻井清彦 1953 「青森縣森田村附近遺跡調査概報(第二次調査)」 『古代』 第10号
- (5)村越潔 1970 「石器およびその他の遺物」(江坂輝弥編 1970 『石神遺跡』所収)
- (6)江坂輝弥編 1970 『石神遺跡』 ニュー・サイエンス社

- (7) 福田友之 1997 「市史編纂だより38 新発見の考古資料紹介—青竜刀形石器と玦状耳飾りー」『広報ごしょがわら』N0.886
- (8) 青森県教育委員会 1974 『小栗山地区遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第11集
- (9) 小野忠明編 1962 『三内靈園遺跡調査概報』 青森市の文化財1 青森市教育委員会
- (10) 青森県教育委員会 1996 『三内丸山遺跡VI』 青森県埋蔵文化財調査報告書第205集
- (11) 朝日新聞社 1997 「三内丸山遺跡と北の縄文世界」『アサヒグラフ別冊』通巻3928号
- (12) 東奥日報社 1994 『今甦る縄文の巨大集落 緊急特集三内丸山遺跡』
- (13) 朝日新聞社 1994 「三内丸山遺跡 よみがえる縄文の都」『アサヒグラフ』通巻3780号
- (14) 東北大学文学部 1982 『東北大学文学部考古学資料図録』第2巻
- (15) 青森県埋蔵文化財調査センター 1989 『館野遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第119集
- (16) 西野 元編 1998 『青森県脇野沢村 濱野遺跡(第2分冊)』 脇野沢村
- (17) 東北大学文学部考古学研究室が1969年5月に濱野遺跡を発掘調査した際に、藤沼邦彦氏が表面採集した旨、藤沼氏からご教示いただいた。
- (18) 青森県埋蔵文化財調査センター 1995 『熊ヶ平遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第180集
- (19) 青森県教育委員会 1977 『水木沢遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第34集
- (20) 青森県埋蔵文化財調査センター 1992 『富ノ沢(2)遺跡発掘調査報告書V(1)』 青森県埋蔵文化財調査報告書第143集
- (21) 天間林村教育委員会 1994 『二ツ森貝塚遺跡発掘調査報告書』 天間林村文化財調査報告書第2集
- (22) 青森県教育委員会 1980 『長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第57集
- (23) 八戸市教育委員会 1995 「西長根遺跡発掘調査」『八戸市内遺跡発掘調査報告書7』八戸市埋蔵文化財調査報告書第61集
- (24) 青森県埋蔵文化財調査センター 1999 『畠内遺跡V』 青森県埋蔵文化財調査報告書第262集
- (25) 鈴木克彦 1984 「風韻堂コレクションの装身具」『青森県立郷土館調査研究年報』第9号
- (26) 福田友之 1993 「参考資料」『五所川原市史 史料編1』 五所川原市
- (27) 平成3年(1991)7月に佐井村在住の所蔵者宅で実見した。
- (28) 村越 潔 1974 『円筒土器文化』 雄山閣考古学選書10
- (29) a. 樋口清之 1933 「玦状耳飾考—石器時代身体装飾品之研究其一」『考古学雑誌』第23巻第1号  
b. 樋口清之 1933 「玦状耳飾考—石器時代身体装飾品之研究其二」『考古学雑誌』第23巻第2号
- (30) 藤田富士夫 1970 「攻玉遺跡からみた玦状耳飾の編年」『玉—日本玉研究会誌』第1号
- (31) 藤田富士夫 1989 『玉』 考古学ライブラリー-52 ニュー・サイエンス社
- (32) 西口陽一 1983 「耳飾りからみた性別」『季刊考古学』第5号 雄山閣出版
- (33) 堀江武史 1992 「玦状耳飾りの分類と製作工具に関する」『國學院大学考古学資料館紀要』第8輯
- (34) 三浦正人 1983 「玦状耳飾」((財)北海道埋蔵文化財センター編)『川上B遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告第13集)
- (35) 秋田県埋蔵文化財センター 1988 「上ノ山II遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II下』秋田県文化財調査報告書第166集
- (36) 市立函館博物館 1958 『サイベ沢遺跡—函館郊外桔梗村サイベ沢遺跡発掘報告書』
- (37) (財)北海道埋蔵文化財センター 1991 『余市町ゴッペ貝塚』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第72集
- (38) 北上市教育委員会 1968 『北上市稻瀬町樺山遺跡緊急調査中間報告』文化財調査報告第3集
- (39) a. 八丈町教育委員会 1986 『八丈町倉輪遺跡』  
b. 八丈町教育委員会 1987 『東京都八丈町倉輪遺跡』
- (40) 青森県教育委員会 1976 『泉山遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第31集
- (41) 前山精明 1994 「“の”字状石製品の分布をめぐる新動向一角田山麓縄文遺跡群の事例からー」『新潟考古』第5号
- (42) 藤田富士夫 1996 「ヘラ状垂飾についての一考察」『画龍点睛』 山内先生没後25年記念論集刊行会

(43) 青森県埋蔵文化財調査センター 1993 『富ノ沢(2)遺跡発掘調査報告書VI(2)』青森県埋蔵文化財調査報告書第147集

※なお、本稿で使用した図・写真は、引用文献に掲載されているものであるが、三内壇園例は白鳥氏が再トレースしたもの、矢伏長根例は、今回あらたに筆者が再トレースしたもの、また、二ツ森例は筆者が以前に実測したものである。